# 多様化する難民のありようと人道支援をめぐる規範・実践・課題

【評者】
岐阜大学准教授
**上野友也**

人類の歴史は、戦争の歴史であるだけでなく、人道支援の歴史でもあった。戦争は殺戮の現場であり、救助の現場でもあった。戦争の犠牲者が飛躍的に増大するにつれて、人道支援が拡大し、国際人道法が整備された。しかし、現在においても武力紛争において殺戮が繰り広げられており、人道支援の役割は減じていない。また、武力紛争の性質が変化するにつれて人道支援の性質も変化しており、両者の最新の動向を不断に捉え直すことが必要である。

武力紛争などの危機的状況において、危険な土地を捨てて安全で豊かな場所を求めて避難する人びとがいる。

**①変貌する「難民」と崩壊する国際人道制度**
—21 世紀における難民・強制移動研究の分析枠組み
**小泉康一・著**
ナカニシヤ出版、2018 年

**②国内避難民問題のグローバル・ガバナンス**
—アクターの多様化とガバナンスの変化
**赤星聖・著**
有信堂高文社、2020 年

**③人道支援は誰のためか**
—スーダン・ダルフールの国内避難民社会に見る人道支援政策と実践の交差
**堀江正伸・著**
晃洋書房、2018 年

**④あやつられる難民**
—政府、国連、NGO のはざまで
**米川正子・著**
ちくま新書、2017 年

**⑤保護する責任**
—変容する主権と人道の国際規範
**政所大輔・著**
勁草書房、2020 年

①では、そのような人びとを危機難民と呼び、彼（女）らに対する人道支援のあり方について問うている。危機難民は、難民とも移民とも同定できない多様な存在であり、人道支援は応急対応するだけでなく、就業による生計の確保といった多様なニーズに応えるための包括的なアプローチが求められると主張する。難民研究の最先端の動向も紹介されており、一読に値する。

このような危機難民のなかには、国境を越えずに国内の安全な地域に避難する人びともいる。国内避難民である。②は、国際機関を中心とするグローバル統治者が、国内避難民ガバナンスの設計や管理、実施や実行において中心的役割を果たすだけでなく、他の国際機関やNGOなどと「グローバル統治者間関係」を構築してきたことを明らかにした上で、集権的、協働的、調整的、断片的ガバナンスという四つのガバナンス類型を新たに提唱した。最新の理論と分析手法を用いた意欲的な研究である。

国内避難民に対する人道支援について、スーダン・ダルフールでの人道支援活動の経験と調査を通じて分析したのが、③である。ダルフールのモルニ国内避難民キャンプでの人道支援が、農耕民と遊牧民、国内避難民と非国内避難民の対立を助長し、伝統的統治システムを変質させた可能性を指摘した上で、国内避難民キャンプにおける受益者間、その周辺社会間の関係性を再構築するために人道支援を活用することを提唱している。紛争地域における人道支援に通じた著者の経験が十分に生かされていた専門書である。

④は、アフリカ東部における難民支援に従事した経験に基づく批判的研究である。国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）は非政治的な機関とされているが、実際にはアメリカなどの拠出国の影響を受けて活動しており、中立性が失われていると指摘する。さらに、UNHCRの職員ですら官僚主義やキャリアを優先して難民保護を蔑ろにしている。このような人道支援に対する鋭い批判を通じて、その課題を鮮明に暴き出した卓越した著作である。

武力紛争などの人道危機に対応する国際社会の責任を明確にしたのが、「保護する責任」の規範であった。⑤は、保護する責任に関する日本で初めての本格的な専門書である。保護する責任の規範がどのように形成され、伝播し、変容したのか。その過程において、国家やNGOだけでなく国連事務総長や独立国際委員会といった多様なアクターが、戦略的に規範に影響を及ぼして利用し、激しい攻防を通じて規範を変容させてきたことを手堅く論証している。●

# 大国の利害と現地の論理がせめぎ合う西アジアの歴史といまを知るために

【評者】
中東調査会研究員
**青木健太**

**①イラン史**
**羽田正・編**
山川出版社、2020 年

**②イラン現代史**
―従属と抵抗の 100 年（改訂増補）
**吉村慎太郎・著**
有志舎、2020 年

**③ターリバーンの政治思想と組織**
**アブドルワッハーブ・アル＝カーブリー・著**
現代政治経済研究社、2018 年

**④紛争下における地方の自己統治と平和構築**
―アフガニスタンの農村社会メカニズム
**林裕・著**
ミネルヴァ書房、2017 年

**⑤ビリオネア・インド**
―大富豪が支配する社会の光と影
**ジェイムズ・クラブツリー・著**
白水社、2020 年

歴史上、イランおよびアフガニスタンは、その地理的特性ゆえに緩衝国家としての役割を負わされ、大国からの干渉を受け続けてきた。今年一月に船出したバイデン米政権下で、これら両国への外交政策が注目される。こうした中、両国を包む地域を「西アジア」として通史的かつ広域的に捉えることは重要であろう。

①は、イランの歴史を包括的に理解する上での必読書である。本書は、山川出版社から二〇〇二年に刊行された『西アジア史Ⅱ　イラン・トルコ』からイラン史に関する章を抜き出し再編成された上で出版された、実務家・研

究者にとって待望の書である。「イラン史」は、国名、領域、あるいは国民のどの構成要素に焦点を当てるかによって、大きく意味合いを変化させる。本書では、「時代ごとに異なる『イラン』の姿を、執筆者が関心をもつ角度から描く」（序文）手法をとることで、多面的なイランの実像に迫る工夫がなされている。編者自身が指摘するように、本書の再編成の過程で九世紀以前の叙述は外されているが、イラン革命以降の現代史が加えられており、「いま」を理解する大きな助けとなる。

②もイランの歴史書だが、①が前史（九世紀～）を含むのに対し、こちらは特に立憲革命（一九〇五～一一年）以来の「従属と抵抗」の現代史に特化している。本書の初版は二〇一一年に刊行されたが、今回、〇一年から一九年末までの政治動向が加筆（第八章）され改訂増補として刊行された。評者には、イランが大国の利害に翻弄される構造は、現在まで大きく変わっていないように思われる。イランの人々が、歴史を通じてどのように大国からの干渉に抵抗し、理想を追い求めてきたのかを、本書は素描している。

アフガニスタン和平を理解する上で有益なのが、③である。二〇年九月一二日から、ドーハにおいて、アフガニスタン政府・ターリバーン間の和平交渉が始まり、ターリバーンの見方を理解することの重要性は論を待たない。しかし、ターリバーンのイデオロギーを説明した資料は圧倒的に不足している。本書は、ターリバーン公式サイト『ジハードの声』のアラビア語版だけに一時期掲載された長文の論考を元に、ターリバーンの思想の基礎を翻訳・解説した貴重な資料である。大義が行動の全てを決めるわけでないものの、今後を見通す上で大いに役立つ。

④は、アフガニスタン地方部でのフィールドワークを通じて、地方の自己統治機構が公的な地方行政機構とは別に有効に機能していることを明らかにした良書だ。欧米起源の統治モデルの導入は、アフガニスタンに混乱をもたらしている。本書が提示するハイブリッドな統治モデルは、注目に値しよう。

最後に⑤は、西アジアのもう一つのキープレーヤーで、今世紀後半には米・中をも凌駕する潜在力を秘めた大国インドの怒涛の経済成長と、それに伴うさまざまな弊害を描写した出色の出来栄えのノンフィクションである。一一年から『フィナンシャル・タイムズ』ムンバイ支局長だった著者が、超富裕層の栄華、汚職や縁故主義がはびこる社会、拡がる格差を軽妙な筆致で記述している。淀みなく流れるような翻訳も、本書の価値を高めている。●